中学・高校の教育を考える

《座　談　会》

中学・高校の教育の現状

出　席　者　（ＡＢＣ順）

香里中・高教諭　明川忠夫
女子中・高教諭　金岡利子
女子中・高教諭　西村幸郎
香里中・高教諭　西尾喜久男
高等学校教諭　津田能人
中学校教諭　山本通夫
（司会）井上勝也
（大学文学部教授）

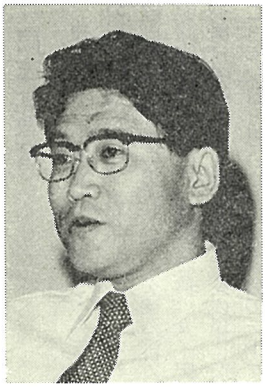
同志社教育

井上　本日の座談会は「中学・高校の教育の現状」という題でありますが、それはわが国の中学・高校の教育の現状を語る部分と私学同志社、具体的には個別岩倉、女子中・高、香里、中学といった学内中・高の現状を語ることになると思います。座談会のテーマは教育の現状でありますが、単に現状を語るだけではなく過去にもふれ、将来への展望も含めて語れるような座談会になればと思っております。学校法人同志社には幼稚園から中学、高校、大学、大学院までありますから、中学・高校教育の現状を語るなかで大学へのご意見もお出しいただきたいと思います。

そこで、最初に自分の教育現場が抱えている問題、教師としていま考えていること、悩んでいること、困っていることを率直に出していただき、現状から入って過去にふれ、将来を展望していくような、そういう方向で座談会を進めさせていただきます。それではどうぞよろしくお願いいたします。

女子中・高の西村先生、どうぞ。

西村　いままで本誌で取り上げられたいろ



西村　幸郎氏

いろいろな同志社の教育にかかわるテーマ、問題について、今日のような出席者で座談会をもつというのは非常に新鮮で、ユニークなものじゃないかという気がしているのですが。というのはたぶん私どもみんな同志社の中・高で教育を受けてないんじゃないか。大学は同志社だという人がいらっしゃると思いますが、こういうメンバーでやるというところがユニークじゃないかと思って、私はこの座談会に期待して参加しました。

正直に、私が現場で抱えている問題というか、いま考えていることを口火を切る意味で言うとすれば、同僚が考えている問題でもあると思うような問題から申しあげたいと思うのですけれども、それは「同志社教育」というもののイメージが、お互いのものとして共有できるような鮮明な形で、中・高の現場では、少なくとも女子中・高ではそれほど鮮明になっていないのじゃないかなという気がするのです。

というのは新任の先生方が教育の現場というか、就職してこられて実際に教室へ行って授業を担当したり、ホーム・ルームの指導をしたり、あるいはクラブ活動で生徒を指導される場合に、どのような教師としての姿勢でのぞめばよいかということが、みんなばらばらで、先輩に聞いても、お前はお前の持ち味でやれというようなそういう自由さがあって、かえってその自由さのなかで、個人の問題になってしまっていて、教師集団がいまどのようなことを正面から問題にし、また共有の悩みとして切り開いていったらいいのかというようなことがはっきりしない。まあ、そういった問題になっているのじゃないかという気がするのですが、いかがでしょうか。

井上　香里の場合、いかがでしょう。

西尾　やはり同じようなことが言えるのじゃないかと思います。ぼくも勤めてまる十年になりますが、入ってきたときに、いわゆる外部から来た者として大づかみに同志社というものしかわかりえなかった。なかへ入ってみて、さきほど言われたように、「同志社教育」の中身というのはこれは言葉で言えるものじゃなくて、ほかの先生方がやっておられるのをそのまま見る、それが本当の意味の内容じゃないかと思うんだけれども、それがちょっとまだわからない。さきほど話がありましたように、現状では教師集団全体で何か一つのことをやっておられるとかいうことではなくて、各人がまちまちである。だからといって、それなら一人一人の人が何も考えておられなくて、何もやっておられないかといったらそうではなくて、一人一人の方々はいろんなことを考え、いろんなことをやっておられるけれども、全体のものにはなってないというところが現状であり、問題点であると思いますね。「同志社教育」はたとえば生徒をどう育てていくんだとか、具体的にホーム・ルームのなかでどんなことをやるかとか、クラブではどんなことをやるかとか、そういった具体的な中身でよそとはちがう特徴(独自性)がある。それが本当の意味の「同志社教育」であると思うんだけれども、いまのところはそういうものが見当たらない感じがしますね。

井上　いまのような点について、中学校はいかがですか。

山本　中学校でも、もうずいぶん前から、同志社中学校はどんな人間を、どういう方法で、どういう教育で創り上げてゆくのかということについての話し合いを何回かやってきています。西村先生と西尾先生が女子中・高や香里中・高のことをおっしゃいましたが、中学校でもその通りなんです。しかし、みんな、自分が「同志社教育」を担っているんだと信じて教育活動に専念しているわけです。

西村　それは確かですね。

山本　でも、そのそれぞれの「同志社教育」と言っているものが、各人まちまちなんですね。私たちには、「同志社教育」というものがあります。それは、非常に漠然としているわけなんです。そして、それの受けとめ方、理解が、それぞれ各人まちまちなのです。

山本　通夫氏

ところが、一人一人のそういう理解にしても、ある部分、まちがって理解しているところもあるかもしれませんが、全体として取りあげてゆくと、全部が全部まちがっているわけではなくて、同志社が言っている「同志社教育」というものとぴったり重なりあえるようなものとして、それを持っているんですね。ですから、あなたのは私のとはこう違うんだとか、それは合っているんだとか、まちがってるんだとかいうようなことは言い合わないのです。あの人も、あの人の、そういう考え方、立場で、あのやり方で同志社の教育を担っているのだな、という理解をしながら、しかし、自分は自分の理解のあり方で、「同志社教育」を担ってゆけばいいのだという相互間の了解を暗黙のうちにしあっているわけです。無理やりに、一つにしあうこともないと思います。

一つのあこがれを持ち、「同志社教育」を担いあう者として同志社へ喜んで集まってきたものたちですから、私はそれでいいのじゃないかと思っています。

井上　いまの山本先生のお話では、中学校あるいは高校としての「同志社教育」はどうあらねばならないかについての共通理解を、あえて求めなくてもいいのじゃないかというご発言でしたが……。

金岡　私は、今の複雑な社会の中での中学・高校の教育では、教師間にもう少し共通理解を深めて、その上で生徒達に立ち向かった方が良いと思っています。個々人の教育では効果は遅々としたものでしかないように感じているのですけれど。

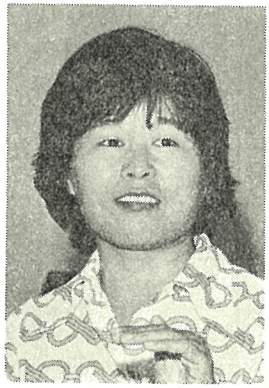
津田　いま山本先生がおっしゃった、それぞれの先生方が自分は自分の立場で一生懸命に教育なさっている、そういうのがやはり同志社ではないかとぼくは思うんですけれども。岩倉の場合ですと、たしかに正直なところ、クリスチャンの先生が非常に少ない現状とか、それからホーム・ルームの運営なんかで同志社の精神はいかなるものかなんてことを、実際考えながらやっているというのがぼくも含めてあんまりいないのじゃないかな。しかし同志社の精神はこうであるというはっきりしたものはべつになくたっていいんじゃないかとぼくは思うんですけども、それぞれ

が先生の個性というものでもって教育をなさっている。

いま話を聞いていますと、それぞれの先生方のほうの悩みがあるみたいなんですけども、ぼく自身はあんまりそういうことは考えてないんです。やはり一貫教育とか精神教育とかいう問題で、生徒の学力の問題とか、宗教教育の問題について憂います。こういうふうなものを大学の先生から突きつけられるということは、やはり一貫教育の問題において何か欠点があるのじゃないかということで、たぶんこういった問題が設定されたんじゃないかと思うんです。三・三・四年というこの一貫教育において、ぼくはとくに中・高・大のなかの高校の教育にあたっていて、一部の生徒の学力の低下とか推薦問題のこととかで、どういうふうに解決していったらいいかということの悩みがまずあるんですね。次に一貫教育という以上は精神的になにか貫き通すものがあるわけだと思うんですけれども、それは中・高段階では十分とはいえませんが、毎朝の礼拝その他の宗教活動で一応の成果はあると思っています。やはりそういうエスカレート式のなかにあって生徒がどうしてもそこの気力がなかったり、やれと言ったってやらなかったりという、そういうイライラがぼくにはまず悩みとしてあるわけです。それがやはり岩倉の体質というか、いちばん大きな短所ではないかと思うわけですけれども。

井上　学力の問題とか、あるいは一貫教育の問題は中学・高校の教育の現状を語る中でぜひふれたいのですが、最初に「同志社教育」ということでお話が出まして、「同志社教育」というイメージが共有できないとか、あるいは全体のものになっていないというご発言とともに、いや、そういったものに拘束されないで、自由に自分たちの責任において、自分たちの教育観で教える、任されているほうがいいんだという肯定的なご発言もあり、また否定的に受け取れるご発言もありましたので、もうちょっとこの問題について話を進めたところで次に移らしていただきたいと思います。女子中・高の金岡先生……。

金岡　西村先生がおっしゃいましたように、はじめて勤めたときにやはり自分の持ち味でやりなさいといわれて一生懸命やっていても――私は勤めまして二年めに高二を担任しました。そしたら生徒たちは同志社へ入って五年めなんです。私は同志社出身でないですし、なにかそこに、私たちのほうが同志社で慣れているみたいな顔をされているようにこちらの方が感じてしまったわけですね。で、一見おとなびて見えるし、また、あ、かわいいのかも知れないと思える。そこのところで、自分の持ち味と言われても、私は全然環境がちがった育ち方での考え方の違いを素直に出せませんでした。そうすると生徒たちもギャップを持ってきて、そのときにどういうふうにほかの先生方にうかがって一緒にやっていけばいいのかわからなくて、ひとりで悩み込んだ状態になりました。自分のなかに閉じこもってしまって、そこから抜け出すのに四・五年かかったという思いがあります。



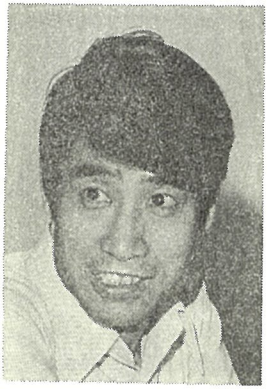
金岡　利子氏

現在の方が、生徒たちが女子中・高でうけている良さがわかってのばして行きたいと思いますし、同時に欠点と感じているところを率直に直してほしいと言えるようになりました。年齢が離れてきた今のほうが、生徒と一緒になって話し合えるような気がしています。

私よりもあとから入ってこられた新任の先生方もいろいろ悩んでおられるように思います。そこのところをお互いに率直に話し合えるようになりたいと思うんです。

私自身は、自分の持ち味でやりなさいといわれて非常に悩みました。ほかの先生方もそうなりがちな傾向があるように思います。

井上　そういう自由さの反面、不便さというか、はじめて女子中・高の教壇に立たれたときの金岡先生の率直なお気持ちが出ていたと思いますが、香里中・高ではこういったものが香里の中学・高校の教育ですといった共通理解がございますか。



明川　忠夫氏

明川　共通理解といわれると、残念ながらないと言わざるをえないと思うんですけれども、ただ何もしていないんじゃなくて、いろいろやってきたわけなんです。やればやるほど、一種の、悪くいえばあきらめみたいなものが一方ではあるのです。しかしそれでは前進しないし、まずやってみようという、その両方があると思うんです。

さっき、のびのびした同志社の雰囲気ということをおっしゃいましたけれども、たしかに大阪なんかからよく先生が組合も含めて見学に見えたりすることがあるのです。同志社ってほんとにのびのびしていますね、非常に明るいですね、とおっしゃいます。そういう意味でたしかにプラス面だと思うんですけれども、さっき言われた、じゃ共通理念はどうやってつくっていけばいいのかという問題が起こります。

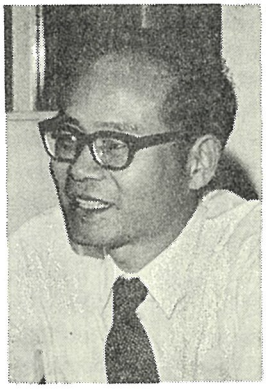
うちでは昭和四十四年か五年ぐらいなんですけれども、中学校の懇談会といったものができまして、中学担当者が全員隔週に一回集まって話し合っています。

何が契機になったかといいますと、香里ではかつて中学校と高等学校両方とも同じ行事予定でやっていたわけなんです。だから中学生の独自性といいますか、主体性といいますか、そういうものがいつもないというような批判があるわけです。一例を挙げますと、体育祭が四十四年ぐらいまでは共通でやっていたのです。中・高一緒にやりますと出場する種目が少ないんですね。だから中・高ともすごく遊んでしまうのです。当時、ＰＴＡの援助で模擬店がいっぱいありまして、競技が済んだあとはすぐそこで遊んでしまう。行事自体も高校生が主体になってやってくれますから、中学生が置いてきぼりになるわけですね。

そんなことがありまして、これでは中学の主体性はないというので、それから話し合って中・高別々の体育祭をやってきました。その他色々とやった結果、授業日数なんかも中学のほうが多いのではないかと思います。一時、中学の先生方から労働強化であるというようなことも出まして、いまはそんなことま

ったく問題にならないんですが、そういう状況が一時あって、それからいろんな教研問題に熱心になって、いま中学懇談会・高等学校懇談会の二本立で動いています。そういうなかでわれわれの共通理念をつくり出す試みをしています。教研誌ができたのは中学懇談会ができたのと大体同じような時期ですが、過去の実践や問題点を一方では教研誌に記録していく。それが将来の共通理念の大きな一歩になると信じています。

だから問題はいっぱいあって、いっぺんにはできないんですけれども、共通理念がないと言ってもしかたがないわけですから、まず何かからやっていかなければいけないという状況が香里にあるといえるんじゃないでしょうか。



井上　勝也氏

井上　香里中・高では、定期的な懇談会、研究会をおもちのようですが、さきほど山本先生は同志社中学校の教育を大切にしようという点においてはみんな共通だといわれましたが、同志社中学校の教育はこういうものであるという、その中身の検討というか、確認のしあいはいままでなさっていたのですか。

山本　ええ、やっていますね。いろんなテーマで研究会や会議をします。たとえば、テストだとか評価について考えようとか、夏の学校諸行事について考えようとか、あるいは、学校財政、建築構想について考えようとか、そういうふうなテーマで討論しあっているなかで出てくるわけです。自分たちがそういうものを通してしようとしている同志社中学校の教育とは何かということがその中で出てくるわけです。しかしそれを共通理念的なものとしてこんなものですよと、出し切れるまで、これがなかなかいかないんですね。

まあ結局、お互いが、言ってみたら、好き勝手なことを個々においてやっているわけなんです。だけども、みんなが、あの人は、あの人のああいう考え方で、ああいうやり方でやっているんだけれど、けっして、「同志社教育」というんですか、同志社中学校の教育というんですかね、そういう大筋から外れたことはしてはいないのだという信頼感を持って、お互いの教育を確認しあい、支えあえているのですね。ですから、そのそばで私もあの人といっしょに仕事をしていたら、自分たちが目ざしている同志社中学校の教育というものが可能になるにちがいない、そういう思いで日々の教育活動をつづけていっているというのが、私なんかの実感ですね。

井上　そうしますと、毎日の教育活動のなかで起こる問題を取り上げながら、そこで同志社の、あるいは同志社中学校、あるいは香里、岩倉、女子中・高の独自性を出そうとするときに、他の私立の中学・高校あるいは公立の中学・高校とちがったものをなにか求めようとなさっている。しかしそれが、こういうものであります、というように言葉で具体的に表現できないといま承ったんですが、同志社は創立後すでに一〇四年もたってなぜそれが言葉で表現できないのでしょうか。そのへんについてちょっとお聞きしたいのです。

西村　私などが思うのは、同志社は長い間、あまりお互いに教育理念とか、「同志社

教育」とはいったい何かといったような問題を確かめなくてもやっていけるのだというような考え方でやってこられた。そのなかで非常に個性のある、また影響力のある、また教師としてもすぐれた先生方が、とくに中学のレベルで代々いらっしゃって、代々の「同志社教育」を担ってこられた。まあ、私はそういう時代を「幸せな時代」と呼んでいるわけですが。古きよき時代と言ってもいいのですが、幸せな時代というか一体感というか、ある点で使命感というか、そのようなものをもっていた時代があったと思うのですが、どこかにデンとりっぱな先生が、たとえば女子中・高でいえばミス・デントン先生たちがおられた。そういう特徴のある先生というかしっかりした先生がおられて、あとの先生はそれぞれ自分の持ち味を発揮しておればそれでよいのだというような、安心していた時代があったのじゃないか。そういう時代に各学校でいろいろな先生方が活躍されて影響を与えられて、ぼくらの同年あるいは先輩の人たちから話を聞くと、ぼくは同志社中学で勉強したときによい経験をしたとか、女子高でよい経験をしたという話を聞くわけですね。だけどいまは、どこかで全体を見ながら、うん、お前はお前の持ち味でやればよろしいというように言ってくれるような人がいなくて、お互いでそういったものをつくり出していかなきゃならない時代に来ているんじゃないかな、という気がしてしようがないのですがね。これは「同志社教育」の継承と創造の問題といえるかと思います。

だから金岡先生なんか、ホーム・ルームについての話し合いを、長年仲間を集めて、二〇人集まるときもあればほんの数人のときもあるのでしょうが、つづけておられますね。

金岡　そんなたいしたのじゃありません。

西村　そういうようにして、自分たちのもっている問題を出し合うという意欲のある人が集まって、いまの私たちが担っている同志社女子中・高の教育とは何かということを、ホーム・ルームについて話し合ったり、あるいは教科の問題であるとか、評価の問題とか、いろいろな問題を語り合うなかで、確かめ合っているんじゃないかな、と思うのですがね。

金岡　たしかめ合い、全体的に見通しがつけられる状態には、まだまだほど遠いような気持があります。

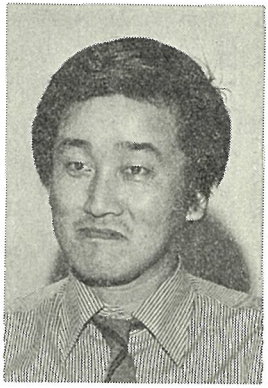
井上　私のさきほどの質問について、他の中学・高校はいかがでしょう。なぜそれが文字として、あるいは言葉で語れないのか…。

山本　中学校の場合、学習評価などに関してでしたらいろんなデータもそろえ、ある程度文章化して、これは同志社中学校独自のものなんだというような形で出せるものがあります。それもしかし、いわゆる大論文というような形で出せるかというと、そこまではなかなか……つまり私たちは実践するだけで忙しいんですね。たとえば私個人としても、生徒指導などでいろんな実践をし、その記録をもっています。ところが自分自身でそれをまとめる時間もないし、それを人に読んでいただき、ご批判いただいたりする機会もないのです。それが多くの先生方の実態じゃないかと思いますね。ほんとうは生徒指導でそれぞれが実践された経験とか、記録としてもっておられるものなどを集約することができるようなことでもあれば、先生の質問に答えられるのではないかなと思いますが……。

各校の特質

井上　各校では入学案内などに、たとえば同志社中学校の教育の特質を数行お書きになっていると思うんですね。同志社はキリスト教主義を教育の基本にするとか、そういうことははっきりうたわれていると思いますが、それにプラス・アルファとして女子中・高にもない、あるいは岩倉にもないものが香里や中学校にあってしかるべきだし、また香里や中学校に書かれていないものが、女子中・高や岩倉に書かれてしかるべきじゃないかと思うんですが、同じ学校法人同志社のなかで一つの共通項に包まれながら、もうひとつ個別な独自性が感じられないですね。先生各人は何かおもちになっているんでしょうが、それがうちの学校の看板というか、特質なんだというように語れるものをお聞かせいただけるでしょうか。

津田　高校の場合ですと、中学と場所的にはっきり離れて三年間、男女共学で教育できるという利点ですね。それから、学校の校風というものは長年にわたって教育された私たちの先輩の先生方の影響によって、我々が感じ取ったり、生徒が見て自然と各々が身につけていくものだと思います。そういった意味では、教育とは恐ろしいものだと思います。岩倉の生徒は自由奔放で一体どうなっているのかとよく言われますが、人を思いやる気持ち、友だちを大切にするという良い面もあるかと思います。



津田　能人氏

山本　入学案内に載せられているような、ああいう立派に文章化されたものでは言えないかもしれませんが、各校それぞれにしかない、独自性といったものがたしかにあるように私は思いますね。個人的なことになりますが、私の娘が女子中学校にお世話になっています。娘をみていますとちがいますね。中学校とどこかちがうのです。どこがちがうんだと言われたら、私は言葉では言い得ませんが、あるのですね。

井上　私どもの大学側から申しますと、中学・高校六年間の一貫教育をうけて大学に入ってまいります。女子中・高で学んだ学生のパターン、岩倉を経てきた学生のパターン、香里の学生のパターンがやはりあります。いい意味でも悪い意味でもね。これが教育の力だなというように思いますね。

そこで私としては、このようにお話し合いをした場合には、こういうのが自分の学校の特質だとか、教育の誇り得る点だということが語られますが、やはりもう少し共通の理解として、いい面はいい面として尊重し、悪い面は悪い面としてそれを除いていく努力をする、そういう全体の確認のもとに各学校が「同志社教育」というか、独自性を出した教育が進められないものか。いちばん最初のお話では各校は先生方に任されている、これはある意味では非常にいいことですね。さきほど香里の先生がおっしゃったように、とくに公立の先生から見たら自由だとおっしゃる点はそういうところだと思うんです。それは同志社のよさだと思っています。しかし、よさだけなんだろうか。金岡先生がおっしゃった点は悪さとして出てきている部分じゃないかと思いますね。

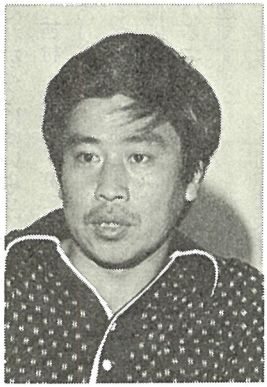
西村　さきほど井上先生が、女子中・高はこういう特色があるというように言えないのか、とおっしゃったのですが、言葉よりは、やはり学校へ来ていただいたらわかるという、そういったものだと思うのですね。女子中・高は、比較的いろいろな悩みを抱えていると思いますが、まとまっているというか、みんなで一緒に教育を担おうという気持ちはあります。しかしこれがよさだと言ってしまうとよさがつぶれてしまうのか、まあちょっと言いにくいですがね。考えてみればこのような同志社の自由さは我国の教育の統制というかしめつけに対して、同志社の教育を守り育てるという復元力をもっているともいえるのではないでしょうか。

井上　時間の関係もありますので先の問題に移りますが、「同志社教育」とはこういうものだというように定義しないところに柔軟性があって、各学校の独自性が発揮できる余地があってよろしいんじゃないか。しかし、私としてはなにかちょっともの足りないものを感ずるんですがね。

明川　定義を出せない悩みがあるんですね。

西尾　一人一人の先生方が自分なりに「同志社教育」をやっているという話だったですね。はっきり言って、同志社関係の学校だったらそれでやっていけると思うんですよ。というのは他私学の生徒なり公立の生徒なんかから考えましたら、学力の面においても、それから生活面においてもやっぱり恵まれていると思いますよ。だから、いくら問題があると言ったって、ひとりの先生ではどうしようもないんだというところまでは行ってないと思うんですよ、それぞれ感じられていてもね。その辺がやはり生徒にとっても温室育ちであれば、教師にとっても温室育ちというような感じはしますね。

山本　いわゆる「同志社教育」という、はっきりとしたものではなくて、曖昧模糊なものであっても、日々の教師生活はできるという安逸さのなかにあって、そういう方への努力を怠っている……。



西尾喜久男氏

西尾　ところが現在の同志社の生徒なり実態を見てみると、そうじゃないと思うんですよ。以前はそうだったかもしれないけれども、徐々にほかのところと同じような問題点が出てきているような感じがしますね。たとえば生活指導面でいえばたばこの問題、登校拒否の問題とかいうことになってくると以前とはだいぶちがうのじゃないかと思いますね。やっぱりふえておりますし、登校拒否症的な生徒なんかも増加しつつある。だから一般の社会の影響はかなりうけている。

たとえば学費なんかの面で言いましても、昨年だったでしょうか、うちの中学の生徒が学費が高いために気にしましてね、親に負担をかけさせたくないということで家出をしたことがあったというんですよ。そういったことはこれまでにはなかったですね。だけどもやはりそういう実態が出てきている。そういう意味では、考えればあるだろうけれども、しかしまだ全体的なところまで至ってないから、さほど大きくはなってないという感じだ

と思いますね。

井上　いままでは個別同志社の問題をお話しいただきましたが、他の公立や私立、あるいはもっと広く言うならば日本の中学・高校の教育が抱えている問題について、いま香里中・高の西尾先生におふれいただきましたが、岩倉あるいは中学、女子中・高で現在抱えておられる問題をもう少し具体的にお話しいただけませんか。岩倉はいかがですか。

津田　この数年、ノイローゼの生徒が非常にふえてきたということは目にするわけです。それから非行の問題については、生活指導――うちの学校では補導部と言っておりますけれども、そちらの先生方が一生懸命やっていただいてますけれども、たばこの問題とか、そういった非行の問題については最近はわりとおとなしくなったということをぼくは思うんですよ。昔はもっとやることが大胆でしたが、今は小規模な噴火がたくさんあるという感じですけれども……。

井上　ノイローゼの原因は何でしょう。

津田　やはり登校拒否というんですかね、そういったのがいちばん多いですね。カウンセラーにいまでもついている人もいますし、それがとくに多いようですね。

西村　女子中・高でも登校拒否症は何件かありますね。拒否症の生徒を一人かかえているだけで、教師にとっては、担任をしている他の健康な生徒四〇数名以上の重さを担っているような感じにさえなりますね。大きな問題です。

井上　それは同志社大学あるいは女子大へ推薦入学をうけることができるということで、あの厳しい受験勉強を高校の段階でしなくてもいい、のびのびと高校生活を楽しむことができるにもかかわらず、やはりそういう問題が共通にあるということは……。

西村　日本の教育全体というよりは、私は家庭の問題だという気がします。ことに女子中・高の場合はお母さんの問題だと思いますね。お母さんとこどもの生まれたときからの関係といいますか、ある場合にはご両親の関係も反映しますし……。やはり過保護というか、自立していない生徒が、自立するために悪戦苦闘している姿だとは思いますが、そのために手を貸してやるというのが、どのへんから貸してやったらいいのかということが非常にむずかしい。私も担当したことがありますが。

井上　同志社の中学・高校の問題というよりも戦後のわが国の教育の問題にどうも原因があるように思いますが、大学に参ります学生で学内から参ります者、あるいは学外からの者も含めて、それはもう痛感いたしますね。大学生として、いわゆる大人として、紳士として扱い切れない問題が山ほどあります。極端に言えば小学生として扱わなくちゃいけないような問題がありますね。たとえば、レポートの期日を守らない。問い合わせてみると、「いやまだ書けてません」と言う。「間に合わなければこういう理由で期日に間に合わないので待ってほしいとなぜ電話かはがきで担当者にことわらないのか」と言うと、「先生、そんなことおっしゃらなかったじゃないですか」と言いましたよ。いちいちそういうことまでも、いわねばならない。家庭のしつけの問題が直接中学、高校、大学にまで持ち越されてきているということを痛感するんですね。

明川　それは香里でも感じますね。香里ですとだいたい中学で一・二名おりますね。よく話し合う機会があるのですけれども、小学

校ではよくできたこどもたちが入学してくると、みんなよくできる。そこで今までクラスでもめだつし、自信のあった生徒が競争心に耐えられなくなる。そういうこどもたちはそう勉強ができないほうじゃないんですけども、もうひとつ自信喪失みたいな形で、自分ですすんで何もかもやっていけない。この前も笑い話みたいに話してたんですけれども、たとえば英語とか数学とか体育とかで、「お前、こんなんでけへんのか」とぼろくそに怒られるようなときがたまたまあると、そういう生徒たちはかつてよくできただけにかえって引っ込み思案になって、自信を失ってしまって自分の殻に閉じこもるのじゃないかと思います。過保護の温室育ちですね。問題児のお母さんに会うと、お母さんに大きな一因を感じるときがあります。

西村　女子中・高の教育というのは非常に長い視野というか、射程距離というか、そういった見通しでやっているわけですから、使命がじつに重いのですね。

井上　大学でも登校拒否症にあたるようなものはたくさんあります。五年六年かかって結局いつのまにか除籍されていく学生のパーセンテージはかなり高いです。

西尾　うちの場合で見たら、そういう生徒は他中学から来た生徒のほうが多い感じですね。やはりなごやかな雰囲気のなかで交友関係を保ってきているから、彼らが精神的に自立していくうえで手助けになっている感じがするけれども、ところが一方は受験勉強体制で正常な交友関係がもたれないままに来るものだから、なかに入っていけないところがあると思うのです。他中学から来てぱっと入っていくと、やはり彼らにとっては閉鎖的にも見えるだろうし……。

大学の場合でもどうでしょうか、そのへんはぼくはわからないですが、うちの生徒を見てるとおっとりした感じの生徒だからあまりそういうふうな問題にはならない、やはり受験体制できた大学生の場合に登校拒否やノイローゼ的なものが多いような感じがするんですけど。

井上　ある意味では逆の現象が出ていると思いますね。といいますのは中学・高校六年間は、中学校には非常に厳しい競争のもとに入りましたが、高校・大学と、言ってみればエスカレーターで上がってきており、厳しさを体験してないわけですね。大学にそのまま入って、何とか卒業できるのじゃないかという安易さ、これが学内校から来ます学生に相対的に見られる現象ですね。四年で自分は卒業しなくちゃいけないんだという厳しさが若干欠ける面がある。しかし、よさとしてはさきほどもありましたように、非常におっとりしていてすれていない。のんびりしていて、温かみが感じられますね。逆に、いまの厳しい現実社会でこれでいいのだろうかという気持ちもありますが。

山本　中学校にもやはり、登校拒否症の問題があります。さきほども出ていましたように、家庭に問題がある場合が多いですね。生育歴とか、親子の関係とか……。また、学力のない者、ほんとうの学力を身につけていない生徒で、いろんな問題があった場合に出てきますね。

同志社中学校というところは、さきほど、井上先生は、エスカレーターでと言われましたが、高等学校へ進むまでの三カ年間、それはもうお尻のたたかれ通しで、けっしてのんきになどしていられない。確かに、高等学校への推薦という大枠があって、ある水準にさ

え到達していたら、それが保証されているわけですが、生徒のうちの約三分の一は、それこそぎりぎりのところで尻をたたかれているわけで、公立中学校に進んで、受験勉強している人たちのほうが、かえってのびのびとしているように感じられますね。お尻をたたきつづけられ、追いつめられた生徒で、なにか問題があったとき、登校拒否へと走るケースが多いですね。

津田　高校に来る成績の良くない子は知能指数をとってみると、たしかに普通より高いのです。ただもうしつけ、学力の面で手おくれの生徒がはっきり言って一割近くおります。中学校には失礼ですけど、すべてにおいて、基礎的な力が全然ついていない者、又、家庭のしつけが全然出来ていない者がです。責任転嫁ではなく高校の責任の大きさも感じます。例えば高校に入って、無気力になる生徒が多くなり、ホーム・ルーム、クラブ、生徒会活動に無関心であったり、しかし、私が最近思うには、この十年来、塾通いの猛勉強の末、入学した生徒を見てますと、〝遊び〟を知らない、本当に独創性がない、ユニークさに欠けるという生徒が多くなったのではないでしょうか。

西村　登校拒否症の場合は、学力の問題がきっかけになる場合もあれば、友達づくりができなくて孤立していくようなことがきっかけになる場合もありますね。

金岡　女子中・高で、中学に入ってきて成績の低い生徒のなかには、小学生時代に塾に行っていたら自分で勉強したという実感もなく何となくはいれましたと言うんです。だから自分で勉強することが身についていなくてのんびりしていて、もっとすればできるはずと思う生徒が全然試験勉強もしない。「しようと思うけど、またやっぱりしませんでした」という生徒が成績の悪い生徒のなかに多いような気がします。

それと、中一に入ってきたときには、小学校段階でリーダーシップをとってきた生徒が大半なので、小学校のときには自分がリーダーシップをとって当然だと自他ともに認めていて、だから自由にふるまえた生徒たちが、中学校へ入ってみると、あの人もこの人もみんなそうしてきた、そのなかで私がそんなことをしてもいいんだろうかという気持ちがずいぶん強くて、悩むようです。

西尾　自信喪失ですね。

金岡　だから役割りを与えられれば、ああしてもいいんだな、というふうに伸びていく生徒たちがいっぱいあります。ほかの学校でしたら、成績がかなりよい生徒がリーダーシップをとっていくのでしょうが、うちの学校の生徒は成績にかかわらず、場を与えられたらほとんどの子がちゃんと上手にやってゆくように思います。

これは一つのよさだと思います。そういう良さをもっともっとのばしていくことができる、もっと生き生きといろんなことを自主的にやっていく生徒達に育てることができるはずだと私は思っています。しかしそのためには教師がお互いに共通理解をもって、その指導方法を考えていく必要があるのではないかそのへんは個々の持ち味というだけではよくできない限界を感じています。なんかもっと全員で考えていくことができればと思うんです。

一貫教育

井上　いま金岡先生のおっしゃったように実際に女子高からみえる学生諸君は自主的に

やる場合は少ないですが、教師が指導すれば非常に素直によくやる。しんどい仕事も文句言わないでやってくれる。私はこれはいい点だと思っているんですよ。

ぼつぼつ一貫教育の問題に入りたいんですが、女子中・高と香里は六年間ですし、岩倉、中学校の場合は三年間ということですが、そこで育てられた生徒諸君のほとんどが大学あるいは女子大に来ますから、一〇年間の一貫教育ということになります。大学から言いますと、専攻によってちがいますが、私どもの教育学専攻では四割近くが学内高校から入ってまいります。しかし、その諸君が過去においてどういう一貫教育を受けてきたのかということについて、中学、高校の先生方とひざを交えてお話をしたことはありません。ですから過去の経験からいって女子高から来る諸君はだいたいこういうパターンだからこういう教育をうけてきたのだな、香里はこうだ、岩倉はこうだというように推測をして、手探りでやっているというのが現状なんですね。私はこれはたいへんなロスだと思っています。やはりこういう教育をやってきましたということをバトンタッチしていただいて、そのよさを大学の四年間で伸ばしていくことによって本当の意味の一貫教育ができると思うんですが、そのパイプがどうもつながってないのじゃないか。中学と岩倉の間など、現状をお聞かせいただきたいのですが。

山本　中学校と高等学校とは、最近、とくにカリキュラムの問題で、各教科ともお互いに連絡会を持ちあって、非常に進んだ教科もありますし、遅れている教科もありますが、だいたい年に最低一回、あるいは二回、ある教科ではもっと多く会合をもって、連携を深めてゆく努力をしています。

井上　津田先生、岩倉の立場から、中学からこういうことを聞かせてほしいとかいった点はありませんか。

津田　私は先程も言いましたが、中・高が離れているというのは、生徒にとっても、大変良いことだと思うのです。各教科の内容については、数年前までは全然知りませんでした。だけど井上先生がおっしゃるロスがあることはたしかです。それで最近、やっとお互いに関心をもつようになったということでしょうか。岩倉の方から言わせていただくなら中学校の教育方針についてわからないことがありました。しかし教科ごとのカリキュラムに関するパンフレット等をいただき、大変に参考になってます。パイプは充分つないでほしいと思いますね。

それから一貫教育と推薦制度について、両者のバランスをうまく保って行かないといけないのですが、推薦制度にあぐらをかいているような生徒を見ているともっときびしくしたら良いのではないかと思う人もいるようです。

山本　ぼくは中学校の教育の立場から、とくに国語科に関して、やはり、高等学校の国語科の先生と中学校の国語科の先生とが一つになって、六カ年間の一貫したカリキュラム計画をたて、それに基いて、学校は離れているけれども、六カ年間で同志社中・高の国語科学習を生徒たちにさせるのだというようなところへ行けたらいいのになあと考えています。

「中・高六カ年間、一貫カリキュラム」は、ある教科では、ひょっとしたら可能かもしれません。でも、すべての教科でそうなることは、おそらく不可能でしょうね。もし、そのことができたら、中学校と高等学校とが合同

できる一つの道をきりひらいてゆくことになるのかもしれませんがね……。

井上　不可能なのか、あるいはやっていかなくちゃいけないのか。いまおっしゃった中学、高校だけで終わるのじゃなくて、大学も含めて一〇年間の射程で考えていく必要があるのじゃないかと思うんですけどね。

金岡　一貫性の教育ということでは、本当は、各教科を通して根本的に「なぜ学ぶのか」という勉強する意味と面白さをみつけながら中学・高校での知識を身につける。そうして各自にあった専門分野の知識を得るため、大学へ進むということができるはずだと思うんです。

ところが、どうしてもエスカレートという安易さに流されて、勉強に対するきびしさに欠けている生徒を多く育てているのが現状のように思います。

山本　世の多くの人たちは、真の一貫教育ができるところが「同志社」なのだと考えているでしょうね。

井上　それを期待しておられるのじゃないでしょうか。

西村　問題はやはり幾つかの点に整理されるかと思います。いま総合学園同志社で一貫性があるというのは中学から高校へ、高校から大学へ推薦入学ができるという進学面での一貫性と、もう一つ考えられるのは教科の問題かと思うのですが、これは組合あたりで教研集会などでかなり工夫して、ここ数年積み重ねてやってきましたね。出席者が少ないのが残念ですけれども。

その場合でも、中、高では教育ですが、高校生の進学指導の場合には教育というより、学問というような視点で指導することが多いと思うのですね。経済学部へ進みたい、文学部へ進みたいが、文学部では何を学ぶのか、その専攻では何を学ぶのかというような形になって、その際、あなた方が中、高で受けてきたような教育のイメージで同志社大学・女子大学の教育があるというように考えなさいとは、私どもはちょっといまの段階では指導できない。というのは厳しい学問の研鑽の場所としての大学のイメージは各学部に対応して私どもは描くことができるのですが、最初に申し上げたような「同志社教育」というような漠としたとらえ方で、この前も、私たちは自分の内面性をみつめたり、あるいは人間の問題を考えたり、ただ強勉するだけじゃなくて、人間としてもっているいろいろな欲求をどのような形で大学では満たしていただけるのかというような質問を、説明に来てくださった教務主任の先生方にしたりしておりましてね。そのへんは私ども中、高の教員からは、同志社大学ではこういう教育がおこなわれているのだというイメージを、中、高の現場と同じようにはもちにくいのが、まあ実感ですね。

井上　いまおっしゃったように、教務主任が五、六月頃各学校に出向いて学部或いは学科の内容説明をいたします。私の学科では六専攻ありまして、一人の教務主任が説明するのですが、一寸無理ではないかと思います。それから生徒の側も五、六月という時期に将来の職業選択にかかわる学部、学科をきめるのは困難でしょうね。ですからもう一度後期の九、十月頃に学科、専攻の教員と生徒の間で質疑応答の形できめの細かい説明会をもつといいですね。そうすれば大学に入ってからやる気を失ったり、自分の選んだ学科、専攻に疑問をもつ学生も少なくなるでしょうから。

やはり学校法人同志社のなかに私どもがあるわけですから、大学に進学したい学内高校の諸君は何回か大学に来て、ゼミに出席してみるとか、大学の講義を聴いてみるとか、そういったことが同志社ならできると思うんですが。そういったことがなされていない。残念です。

西村　心理学教室や工学部を見学させていただいています。少しずつそういった道が開かれてきているようには思います。

井上　こういったことは、もっと高校の側から大学側に要求を出していただいてもいいのじゃないでしょうか。

明川　今、井上先生がおっしゃったように文学部は三人で全ての専門のことは説明できません。学部説明をしていただく意義は、もちろんあるわけですが、もっと意義あるものにならないかと思いますね。香里では、学部説明会の少し前に教育実習があるのですが、この時、ホーム・ルーム等を通して、実習生に学部のことをしゃべってもらうことがあります。実習生は、大学に行くなら何を勉強するかを考えて行けと、えらそうなことを言っています。実は大学へ入ってから、それを自覚した者が多いのですが、それを教師じゃなく実習生から語られると、生徒は身近かなものとして受けとるようです。そして、質問もどんどんする。これは生徒になかなか好評ですね。

井上　学生の立場で話しますから。

明川　それから私たちは、大学の入学案内に書いてある専門の教科で学部の説明をする時があります。これも専門外ですとよくわかりません。実習生や先輩に説明させたら、案外深みのあるものができるのではないでしょうか。

それから、もうそろそろあるんじゃないかと思うのですが、各学部の先生方と高等学校の先生とで学部との懇談会がございます。卒業生の実態をいろいろ教えていただいて勉強にはなるのですが、何かもう一つもの足りないのです。学部によって差はあるかと思うのですが、忌憚のない意見の交換はあまりないのです。私たちは、かしこまって聞いていることが多いのですね。大学の方から、卒業生の悪い例を言われ、今年は推薦の枠を何名へらしたいと言われると、身がすくむ思いで、かしこまってしまうのです。また高三の担任だったら何とかしてクラスの生徒の〇〇を〇〇学部へという意識がちらちら動いてくるのです。オール同志社の眼で推薦制をと一方でたえず考えながら、エゴが出てくるわけでございますね。懇談の時期を変えてみるとか、よりよき推薦制を進める意味で、もう少し何とかならないでしょうか。

西村　私もちょっと出席した程度で、経験はそう多くないのですが、最近各学部とも、学内進学者とか、あるいは公立高校からの推薦入学者、そういった学生のその後の成績などの追跡調査を非常によくしておられて、私どものほうの教育のいたらないところを指摘していただくこともあったり、よい面を認めていただいたりして、具体的な話はその場所でかなりさせていただいているように思います。

井上　それが年に一回でなくて二回でも三回でも、また代表だけが出ていくのじゃなくて、自由に意見を述べたい者が出て行けるようなフランクさがほしいですね。それが一つの制度化されてしまっているところに問題があります。

西尾　それと、推薦の前になってくると、

われわれとしてはどうしても採っていただくということがあるから、どちらかといえば、こちらは聞く一方になりがちでしょうし、だからそういう意味では、オール同志社としての目から見た話し合いというのは、やはり別の時期にやったほうがいいでしょうね。

明川　時期がちょっと悪うございますね。

西尾　具体的な問題を抱えもってということになってくるとね。

西村　さきほどおっしゃったことで、高校生が大学の講義に参加するとかゼミに参加する。そういった大学見学のような経験をすると同時に、大学の先生が、一日駅長じゃないですが、一週間ぐらい中学や高校の様子を見に来ていただくとか、あるいは具体的に教科の授業を担当していただく、一日生徒たちと生活していただくと、それぞれの学校のめざしているものをかなりはっきりつかんでいただける。一日ではむりかもしれませんが、そういった計画もあっていいんじゃないか、と思いますね。

井上　私は一日とか一週間でなくせめて半年くらい、できれば一年くらい、お互いに大学の先生が高校に行って教え、高校の先生が大学に来て教え、あるいは中学校の先生が大学に来て教える、そういう人事交流があってしかるべきじゃないか。そしてたとえば岩倉の先生が女子高に行かれて女子高のよさを学んで、また岩倉で教えられれば、岩倉の教育はさらにいいものになるだろうし、中学、高校の先生は、自分たちが教えた生徒が大学でどうしているかということも見ていただきたい。一貫教育のためにも。

要するに同志社の大学、中学、高校の間で同志社の生徒、学生に良い教育をしようという観点から、話し合い、それを実行できる場がほしいですね。人事交流も、各校が独立採算制であっても、たとえば私が一年間高校で教える場合には、大学でサラリーを保障するあるいは高校の先生が一年間大学においでいただく場合には、高校がサラリーを保障すれば、それでできるわけですからね。

明川　いまの人事交流の問題ですけれども立命館の中、高、大は、昭和三〇年代からと思いますが、かなり早くから交流をやっていますね。その契機は、推薦制度というものはなくてもいいんじゃないかという形で、推薦制盲腸論というのが立命館で出たらしいんです。喧々がくがくして、そのなかから生まれたのが立命館総合教育研究会なんです。毎年夏、いまどれだけ集まっているかわからないんですけれども、いちおう中、高、大が集まって研修会をやっておられるのです。その研修報告集も出ています。私一度立命館へ取材みたいな形で行きたいなと思っているんですが、いま井上先生のお話に出た給料はもともとのところでもらうという形で立命館は交流しています。同志社でできないことはないと思うんですね。同時にいま京都の私教連でたしか春闘要求のなかに人事交流という問題が出ていますね。まだ私学のなかではっきりした前向きの姿勢でやっているところは少ないようです。だから人事交流といいましても、同志社学内でやる場合、京都の私学のなかでやる場合、あるいはもう少しひろげましてキリスト教学校教育同盟のなかでやる場合といろいろあると思うんです。どの場合も大切だと思うんですけれども、まず同志社のなかでやりたいという願いは切実なものがありますね。

西村　推薦の問題などは、一貫教育の問題の大きな位置を占めていると思います。生徒

の数とか、大学の学生の在籍数の何パーセントを占めるとか、そういった問題であると同時に、もっと同志社教育といいますか、なぜ推薦制度でなければならないのか、というとおかしいですが、推薦制度によって、中、高の教育がどのように育てられているのか、あるいはある点でゆがめられているのかというようなことについても、大学の先生方に関心をもっていただきたいと思いますね。また中、高の側から問い直すことも必要だと思います。そういったことは、ある点で「同志社教育」というのはいったい何かということをもう一度問い直すことでもあるでしょうし、そのときそのときに問い直していくことでもあると思うのです。そういった意味では、いろいろな場面で同志社が総合学園としてめざしているものをたえず検討し直す。そういうなかで、たとえば教育実習なり推薦制度が問題になるのだとある程度安心しておられるのですが、技術的な問題といいますか、そういった面での問題になってしまいますと、各学校のエゴが出たり、あるいは我が子かわいいとか、そういったことだけで終わってしまって、なにか淋しいような気がするのです。

そのような話し合いがいろいろとできるためには、やはり同志社が総合学園として教育について考える場所、それから時間とかチャンスがあって、研究費も出す、予算措置もするというくらいでないと、たとえばぼくは関西学院などへ行くと、ときどきうらやましいと思いますが、そういったセンターのようなものをもっていますね。そういう点ではやはり関西学院はメソジストの気風があるなと思って、ちょっとかなわんところもなくはないのですが、同志社は声は出してもいつまでたっても実現しないというか、各自がやっていればよいというところがありすぎるような気がします。ぜひ教育センターのようなものをつくっていただいて、二、三日ゆっくり大学あるいは中、高お互いに教育の問題で話し合う。現状を憂い、あるいは希望を語り、ときには喧々がくがく大いにやって、二次会のほうが花が咲くということもありうるわけですから、二次会や三次会が持てるような場所、そのチャンスがほしいと思います。

井上　まったく同感ですね。

津田　大学の先生方が高校の授業をやれという話がありましたが、そこまで行かなくても、私の学校では時々、大学の先生が礼拝の時間にお話なさる機会があります。その時に生徒達はその先生の人間にふれて、何かを感じるということもあるかと思います。それから一貫教育のなかにあって先生の人事交流も良いのですが、生徒の方にも問題を感じます。たとえば大学を選ぶという時点で、どこへ進学したら良いのかわからない、つまり自分の問題として意識が乏しい生徒が多いこと。又、このような生徒を育てているという現状。これは問題だと私は思うのです。

井上　大学というところは何をするところかということが、学内から来る学生も、学外からくる学生も、いまの学生はよくわかってないんですね。

明川　いま一貫教育委員会というのがございますね。あれは部長級の先生方ですか。

井上　あれは若干の部長と校長先生方で、校長先生が各校に帰られて、委員会の中身をどういうふうに報告なさって、それを具体化なさっているのか、そのへんもお聞きしたいですね。

明川　香里では会議の席で報告される場合と、こちらのほうで要求して、会議録を配布

してもらうことがあります。あれは全部記録になって残っていますからね。私いつも思うのは、すばらしい組織をつくりながら、どうしてあんなに忙しい先生ばかりにあいうだいじな研究会をまかしておられるのか、もっとわれわれ一般の教員が参加できるようにして、下から色々意見を聞かないことには、失礼な言い方ですけれども、何もならないと思うんです。あれはせいぜい開いて年に二、三回くらいじゃないんでしょうか、そういうことを伺っておりますけれども。

山本　現在その会は中断されていますね。

明川　同じつくられるなら、全学園のさまざまの意見を吸収する開かれた組織にしてほしいものです。非常に残念な組織だと思います。

西尾　いまのお話に関連するわけですけれども、結局オール同志社内でそういった話をたとえばさきほどの推薦の懇談会、それから宗教関係で何かあるという話も聞いておりますけれども。

西村　全同志社キリスト教教育委員会。

西尾　それと、昨年は、まあまあ成功だと思いますけれども、組合の教研集会ですね。だけども、やはり定着しないし、あそこへ行って何かいいことがあったというところまでいかない。どこに原因があるかというと、自分たちの学校のなかでそれぞれのいろんな問題が起こったときに、どこまでやっているかということがかえってくると思うんですね。そういう意味では、やはりそれぞれの学校でまだまだそこまで行ってないというところに、いちばん大きな問題があるんじゃないかと思うんですね。だから集まっても、どうしても上べだけの話になったり……。

井上　組合主催の教研集会に昨年十二月出席したんですが、一言でいえば時間不足ですね。やはり実のあるディスカッションをしようと思ったら、一日かけないとだめだと思うんです。講演があって、そのあと三時間個別討議をやって、いいところまで話が行ったところで時間切れで終わりました。そしてそれも年に一回ですね。それからさきほどおっしゃったキリスト教教育委員会主催の同志社教職員研修会も、今年三月行なわれたのに出席しましたが、これは泊まりがけで午後から翌朝までということで、比較的時間は長いものの、やはり一年に一回では不十分だし、話し合われた内容がどのようなルートを経て同志社の教育に生かされるのかも判らない。われわれの現在の教育の問題を卒直に語り合い、それが明日の教育に生かされるような場をつくっていかなくてはいけないんじゃないでしょうか。

西尾　昨年の組合教研はぼくが部長をやっていて、言われるとおり、ぼく自身もそう感じながらやっていたんですけれども、しかし時間不足やらいろいろあるけれども、それでもやっぱり何回か積み重ねていかんと仕方がない、だからやろうということで、そんなに大きく構えていなかったんです。さきほどの話ではないですけれども、たとえば先生方が集まる、いつでも沢山の人が集まればいいですけれども、二、三人というようなこともありますわね。しかしそれでもやらんと定着していかない。

西村　そういった会合へ出て、私と同じ問題であの方も苦労しておられるのだなということを知る。そのことが私は収穫だという気がするのですね。きょうだって、同志社の教育の姿はこうだとすぐまとめることは困難なことでしょうし、どの会合に参加しても、同

じ問題で苦労しているのだなということをお互いに知り合って、少しでもつづけて根気よく問題を掘り起こし、整理し直し、とらえ直して、中、高の教育の問題はここにあるのじゃないかということをいろいろな機会に試みるより道がないですね。たとえばいま女子中・高ではバザーを検討し直しているのですが、そういった作業のなかでお互い教員仲間の教育にとりくむ姿勢とか、考え方とか、問題のとらえ方というものを知るわけで、教諭会のなかで教育論をかわすのはなかなかむずかしい。やはり適当な材料というか、機会がないとむずかしいですね。だいたい教育というのはそういうものじゃないでしょうか。新島先生は大学をつくられるときにこういう大学をつくるんだということをおっしゃった。それはそれなりに意味があって、また今日にもそれを再解釈して実現していかなければならないという、そういった性格のものでしょうが、しかし、何か理想像のようなものがあって、それをめざして自分たちはまだそこまで行っていないからがんばるのだという、そういう形の仕事ではなくて、教育は現場があるかぎり毎日進んでいる。そういう現場をもっと生かす方法というか、いまの交流とか研究会などは、結局そういうことじゃないかという気がするのですがね。

西尾　そういう意味では、たとえばこういう座談会なり集会なりにおいてやるけれどもどうしても具体的な話になりにくいので、たとえばそれぞれの学校の校務分掌がありますね。具体的な問題は日常、教務なら教務で抱えているわけですね。そういうもののお互いの交換会、交流会なんかをやると、かなり議論が具体的で、かつ建設的な話も出てくるんじゃないかという感じがしますね。そういうのは前に岩倉のほうで生活指導関係でやったことがありましたね。

明川　去年の二月の初めでした。あれはよかったですね。私よく考えるんですけれども、たしかにどういう生徒を育てるか、あるいは推薦制をどのように生かせばいいかという形でいろいろ取り組んでいくなかで、一校だけではよくならないということがいつも一方であるわけです。そしたらいろいろ集まってやらなきゃいけない。それではどうするか、立ちどまって少しやってみるが、結局そこで退いてしまう場合が全体に多いんじゃないでしょうか。悪循環していますね。

山本　それは、退いてなんかいないで呼びかけてくだされればいいわけです。同志社内中、高のなかには、それに応じてゆく先生がたも数多くおられると思いますよ。日常的に、親しい人間関係をつよめる努力をしながら、お互いに情報交換しあう緊密さを保ってゆけたら、それも可能なのではないでしょうか。

明川　前に話に出ました関西学院とか立命館の場合には兄弟校がございませんので、そういう意味ではやりやすいと思うんです。同志社の場合は兄弟校がたくさんあるわけですから、それをどうやって組織あるものにしていくかという形で考えると、現状では人事交流はない、教研交流もない。もうどうでもいいわという形が実際は多くあると思うんです。

山本　そうですね。確かにそういう面が認められますね。

明川　人事交流が今迄たびたび言われながら実現されないところに、同志社の現実の姿があるわけですが、まず、私たちは何をすべきなのか。単純なことですが、先ほど西村先生がおっしゃったように、学内の問題を根気よく掘りおこす努力をすることだと思います

ね。学内の教研を活発にすることが、オール同志社の立場への、ものの見方、ひいては、人事交流の一歩、よく言われている同志社教育センターの設置につながるのではないでしょうか。そして、一方、組合や当局へいろいろ働きかけることも忘れてはいけないと思います。

西村　今おそらくカリキュラムの問題をそれぞれ各校で考えていらっしゃるでしょう。カリキュラムの問題を考えるときなども、戦後の教育の歴史を考えざるをえないし、そしてまた同志社の教育の歴史を考えれば、その時代時代にもっていた意義というか、色合いというものをやはりもう一度とらえ直して、いまの時代に生かさなければならない面もあると思うのです。

たとえばいまの女子中・高の場合、カリキュラムというのは単に時間の問題というだけじゃないですよね。文部省のほうから呼びかけてくる一つの枠のようなものがあるわけですが、それにたいして、同志社の教育はそれとはちょっと違うんだ、あるいはこの点は文部省のねらっているところでは落ちている、あるいは文部省がいっているようなゆとりのある教育というのは同志社では先取りしているとか、そういったものがパッパッとその都度その都度出てくるかというと、そうではなくて文部省の少し後について行くような、そういった現実であるとしたら、やはり同志社の中、高の教育はこれでいいのかということになる。そういった点からも、また歴史的反省に立っても、再考する必要がありますね。なにも組合の問題とかそんなものじゃなくて、教育の現場にかかわっているみんなの問題ですね。これはやらなければならないでしょう。

西尾　学内の各中、高で制度がかなりちがっていますね。選択制をとっておられるところもあれば、香里はそういう形はとっておりませんね。そういうこと一つとって考えてみてもかなり議論ができる。また問題意識を持っていなかったらいけない点があると思うんですね。だから、そういう具体的な問題で交流ができればよいと思います。

金岡　各学校間の交流はだいじだと思いますし、積極的に参加したいと思います。けれども、いま四年めくらいに入っているんですが、女子中、高のなかでホーム・ルームの指導について考えましょうということを呼びかけてきたんです。いつも最低限五、六人は参加して下さっているのですが、なにかひろがりをもてない悩みをここ一年間ほど感じております。もっと参加してほしいと思っているのですが、「ああ、やってはるわ」みたいなことで、それは私の考えていることに批判があるのかもしれません。批判でも何でもお互いに自由に話し合いたいと思って呼びかけているんですけれども、ちょっとずつひろがりはあっても、大きく見たらひろがっていない。こんなことで意味がないんじゃないかと話したりすることもあるのですが、やはり地道に話す機会をもちつづけることで少しでも参加してくださる先生があるから、それを続けていくことに意味があるんじゃないかと思っているんです。自由に話し合いたいと思いながら同じ学校のなかでもなにか話し合えない部分があるようです。けれども、いっしょに話し合わない先生方もそれぞれ一生懸命なさっている。だから、私が最初に言った悩みにつながっていると思うんです。そこを越えてこそ向上があるんじゃないか、やはり共通に話し合えていないようなところは各学校間

にまでひろがっていかないので、学内だけでもそこらへんもっと話し合えないかなと思います。ホーム・ルームの指導なんていうのは、お互いに中、高の先生なら話し合えるんじゃないかと思いながら、話し合えていないところがあるんです。

井上　中学、高校の教育現場におられる先生方からいろいろお話を出していただきましたが、同志社のよさというのは、各校が独自に教育を行なう自由、各教師が自分の教育観で教育を行なう自由が保障されている。そのよさを一方において尊重しながら、他方において、一つの学校内、あるいはもう少し大きくいって学校法人同志社全体の教育の問題について、あるいは現実に抱えている問題について、率直に話し合う場がほしいなという意見がすべての先生から出たように思います。そういう問題を今後具体化していくためにはどうすればいいのか、金岡先生のおっしゃったようなひろがりがなかなかもてないんだという問題は、何ゆえであるのか。教育というものは、自分のいまやっていることはこれでいいのだろうか、自分の育てようとする生徒はこういう理想像でいいのだろうかと、そういう反省をつねに繰り返しながら、一歩でも半歩でも前進していくものではないかと思うんです。そういう意味においてもつねにお互いに教師間の切磋琢磨、相互批判、あるいは各中学、高校、大学同志の教育批判、交流が必要であるし、今後の私学同志社がわが国の教育に貢献し、あるいは独自性を発揮していく場合には、そのことをもっと積極的にやっていかなければいけないのではないかと考えます。

この座談会では、来年四月からスタートいたします同志社国際高等学校についてはふれませんでしたが、別の機会に総合的に取り挙げられることを期待いたします。

本日は長時間まことにありがとうございました。

同志社関係出版物

新島　襄（岡本清一著）	同志社大学出版部	五〇〇円
新島　襄（魚木忠一著）	〃	三〇〇円
新島襄の生涯（北垣宗治訳）	小学館	八五〇円
回顧七十七年（大塚節治著）	同朋舎	六、〇〇〇円
髪の掠奪（岩崎泰男訳）	同志社大学出版部	一、〇〇〇円
新島襄書簡集（編者代表・住谷悦治）	岩波書店	二一〇円
同志社で話したこと書いたこと（久永省一著）	洛北書房	七五〇円
写真集「同志社一〇〇年」（学校法人同志社）	豪華上製本（一二、〇〇〇円）・並製本（九、〇〇〇円）	
写真集「同志社―その一〇〇年のあゆみ」（学校法人同志社）	上製本（一、二〇〇円）・並製本（七〇〇円）	

――送料は別――

取扱・同志社収益事業課